

談話におけるAdverb Preposingの意味と機能

迫, 由紀子
九州大学大学院文学研究科 : 修士課程

<https://doi.org/10.15017/6786999>

出版情報 : 九大英文学. 32, pp.269-281, 1989-11-20. The Society of English Literature and Linguistics, Kyushu University

バージョン :

権利関係 :



談話における Adverb Preposing の意味と機能

迫 由紀子

0. 序

副詞が文のどの位置に現われるかについて、その意味的タイプによる分類や extraction rule による統語規則の面から規定したものがあるが、話題化のような名詞句の前置変形に較べ、副詞の移動はかなり自由に行われ、それにはいろいろな要因や理由が働いている。また、副詞の意味による統語的分布状況についての事実や文における論理構造に関する文献は多いが、副詞表現の移動に関しての意味解釈を包括的に扱ったものは少なく、副詞表現をどこに置くかは、文体論的な癖と見なされているようである。

しかし個人的なスタイルの問題と言っても、受け手により的確に情報が伝わるための普遍的な規則や理論を持っているはずである。本稿では、特に文末の位置と文頭の位置との副詞の構造的・機能的違いについて考察し、さらに談話機能の点から、副詞の前置の意味するものを幾つかのタイプに分けて例証を試みる。

1. Adverb preposing の意味解釈

1. 1. 文の構造から見た意味

Geis(1986)は、文頭に置かれた副詞表現は、文尾からの移動ではなく最初から文のはじめに置かれたものであるとして、次のような不定詞構文におけ

る副詞の意味解釈の例を挙げている。

- (1) a. John promised to phone me at noon.
b. At noon, John promised to phone me.

(1a)において、“at noon”はpromise, phoneのどちらを修飾しているかambiguousであるのに対し、(1b)のat noonは、promiseを修飾しているとし解釈されない。つまり、(1b)において前置された副詞は、(1a)の文尾に置かれた副詞句とは統語的には別のもので、VPの修飾語ではなく、S全体を直接修飾しているのである。太田(1980)やLeech & Svartvik(1975)が提出した例にも、文構造からの分析を試みているものがある。

- (2) a. I saw him in the woods.
i. I saw him when I was in the woods.
ii. I saw him as he was in the woods.
b. In the woods, I saw him. (=i.)
(3) a. John stayed in England.
b. * In England, John stayed. (以上 太田)
(4) a. The children behave naturally. (=in a natural manner.)
b. Naturally, (=of course) the children behave well while you are here. (以上 Leech & Svartvik)

(2), (3)における場所を表す副詞表現は、動詞の下位範疇化に関する統語上の制限を示している。つまり、前置された副詞はVPの要素ではなく、Sの要素として解釈されるのであり、従って(3)のような、動詞の下位範疇に義務的に関与する場所を表す表現は自由に前置できない。¹(4)についてLeech & Svartvik(1975)では、副詞の、文に対する juncture という面からその意味を分類しており、(4a)の‘naturally’は、文構造の中にその一部として組み込まれている合接(adjunct)の副詞であり、(4b)の‘naturally’は、文構造から遊離している離接(disjunct)の副詞として機能していると述べている。

これらの事実は、文尾の副詞句の意味解釈の ambiguity、さらに、文頭に現われた時の意味解釈を、文構造の違いから、特に動詞句との関係という点から説明している。このことは、副詞の意味的タイプとその作用域に関する一般的傾向としてよく言われており、文頭という位置は、普通、文全体にかかる文副詞の現われる位置なので、そこに現われた副詞表現も同様の振る舞いをすると考えられる。しかし、実際には、副詞の前置は話題化のような名詞句の前置に較べて統語的にもかなり自由に行われる。また、副詞を前置すると同時に文の他の要素も移動する倒置構文というようなものもあり、文構造や文法の好む規則でそういった多様な意味解釈を捕えきれないようである。

1. 2. 情報の構成から見た意味

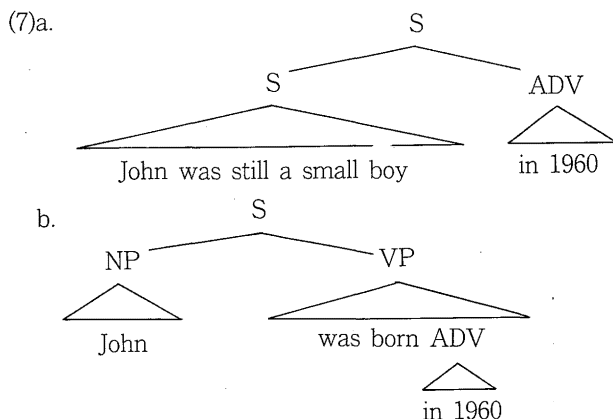
文における情報の構成は、文の要素の持つ情報量の少ないものから多いものへと並べるのが原則である。文頭の副詞はそういった意味で、話し手による文についての状況の設定や文の内容や形式に関するコメントであるから、文全体が伝える情報の中心にはならない。Kuno (1980) は、文における副詞の情報量が syntax に影響を与えているとしている。

- (5) a. John was still a small boy in 1960.
- b. John was born in 1960.

(5)は同じ副詞句を持っているが、情報伝達の上では、その重要度が異なる。(5a)は1960年にジョンはどうであったかが情報の中心であり、‘in 1960’は状況設定の主題的副詞(thematic adverb)である。これに対し、(5b)は、ジョンが生まれたかどうかの方が大事ではなく、「いつ」生まれたかがより重要である。Kuno はこれを‘time-specify nonthematic adverb’と呼んでおり文の意味を変えずに前置はできないと言っている。

- (6) a. In 1960, John was still a small boy.
- b. In 1960, John was born.

(5a) は、(6a) とほぼ同義である。一方、(5b) は (6b) とは異なった意味を表す。つまり、(5) の解釈において、(a) では副詞句を文頭に置いて同じ主題的副詞の解釈が保たれているのに対し、(b) には、それが保たれていない。このように、文頭の位置は相対的に情報量の少ないものの来る位置であって、(5b) のように情報量の多い specific な副詞句を前置すると、家族の年代記のように、各年を主題として、その年の出来事に伝達の中心を置いた述べ方になってしまう。²Kuno はさらに、副詞句の意味解釈の相違と構造的相違とに対応関係があると考えている。



(7) に見るように、副詞句が主題的に解釈される場合は文修飾の副詞として、そうでない場合は述部修飾の副詞句の構造を持っているのである。

情報の重要度は、また、複文における構造的な主従関係にも影響を与える。複文は普通、主節を中心として、従属節がそれを補ったり修飾するが、こうした構造上の原則が談話の原則と一致しない場合がある。すなわち、主節の内容より、従属節の内容の方が情報としてより重要と考えられる場合である。

(8) When did you get angry ?

a. I got angry when John hit me.

b. * When John hit me, I got angry.

(9) What did you do when John hit you ?

- a. I got angry when John hit me.
- b. When John hit me, I got angry.

村田 (1984) は、(8), (9)において、文尾の副詞節は伝達の中心になるか否か中立的であるが、前置された副詞節は答えの中では前提部であって、伝達の中心にはならないと述べている。一方、Lakoff (1987) は、発話行為構文と syntax との関係において語用論的前提が複文の構造に影響を与えていると述べている。例えば、文頭にある because 節は、前提としての性格を帯びている。

- (10) a. We should go on a picnic, because isn't it a beautiful day!
- b. * Because isn't it a beautiful day, we should go on a picnic.
- (11) a. I'm leaving, because here comes my bus.
- b. * Because here comes my bus, I'm leaving.

(10), (11)からもわかるように、because 節内の語順変更は伝達内容に対する話者の態度や感情を示すものであり、情報の中心部に向けられるのが自然である。このような発話行為構文は、断定部にしか現われないので、文の前提を担う従属節には生じることができない。³

これまで述べたことから、文尾の副詞句が文構造の面から、また談話構造の面からも二通りの解釈を持ち得るが、前置するとういう解釈の ambiguity が保持されないことがわかった。つまり前置された副詞は、文構造的にも情報的にも、文尾からの移動ではなく、はじめから文頭にあってその位置で意味解釈を受けると言えよう。そして、副詞の前置には、構文的規則と談話的規則とが絡み合った機能と意味があることが考えられる。

2. Adverb Preposing の談話における機能

前章では主に文を構成する規則といった談話構造の外面的な要因を明らかにすることによって Adverb Preposing の特徴を幾つか述べてきた。次に文頭という位置が文脈の中で果たす談話的機能、また文頭の副詞がコンテキストの形成や結束性にどのように関与しているかについて例証を試みる。

2. 1. 連結的前置

文頭の位置は、文尾よりも、先行文脈と結び付きやすい。また、文頭は文の主題であり出発点として機能するから、その出発点が先行文脈と結びつき、そのため文脈と前置構文とが滑らかに結びつく。以下、文頭の副詞表現と先行文脈との連結における要因を幾つか挙げる。

2. 1. 1. 談話の円滑な流れ

- (12) Kaifu has also inherited the enormous task of revising a controversial consumption tax launched in April. Beyond that, he must draft a plan for political reform as a means of winning back public trust. (*TIME*, August 21, 1989)
- (13) Imagine it he's actually going to freeze to death if he can't get a fire going. With a fire, he can dry his socks and things and warm himself. (R. Carver, "Where I'm Calling From")
- (14) How Burma will emerge from its emaciation is also unclear. Even if the government, against all odds, reaches an accord with the N.L.D., the country's economic pulse is weakning and near failure. Behind the falling fortunes lies the Burmese Way to socialism, the odd amalgam of Buddis-

m, socialism and isolationism that Ne Win introduced in 1962. (* the N.L.D.=the National League for Democracy) (*TIME*, August 14, 1989)

上の例に見るように、連結的前置には、前置された副詞句内に前方照応表現や先行文脈との明示的な結びつきを示す表現が入っていることが多い。特に、(14)では、副詞句の前置と共に倒置が起こっており、長く重い主語を文末の方向へと焦点化している。つまり、前置された副詞句は、出来事が先行文脈の一連の流れの中でどういう関連や重要性があるかを示すと同時に倒置を起こすことによって文内部の情報を談話構造的により望ましい位置に配列し直す機能を果たしているのである。⁴

また、こうした情報のバランスを取るという談話機能が知覚の順序を反映している場合も見受けられる。

(15) The bunk-house was a long, rectangular building. Inside, the wall were white-washed and the floor unpainted. In three walls there were small, square windows, and, in the fourth, a solid door with a wooden latch. Against the walls were eight bunks, five of them made up with blankets and the other three showing their burlap ticking. Over each bunk there was nailed an apple-box with the opening forward so that it made two shelves for the personal belongings of the occupant of the bunk. (J. Steinbeck, *Of Mice and Men*)

(16) He took the glass over to the sofa and sat down. He put the glass on the coffee table. Up went his feet onto the coffee table, next to the champagne. (R. Carver, "Careful")

(15)は劇小説と呼ばれる戯曲形式の小説の第二幕に当たる部分の出だしからの引用であるが、「読み手（観客）の視点」と「そこにあるものの同定」とが

「主題－題述」の関係を成している。また、文頭の副詞句は先行文脈の内容そのものを連結しているというよりは、むしろ初めて見る舞台設定に対する観客の視点の移動の順序に沿って秩序だっており、次から次に移動しながらも次第に視点が舞台の細部へとしぼられていくように誘導している。また、それにつれて文末の主語の名詞句も長くなり、視野に入ったものに対する同定が注意深くなされているのがわかる。(16)は「彼」の動きに沿って文が並べられているが、方向を表す副詞と主語の倒置は、突然視界に現われた彼の脚がその意外性の故に情報量が多くなって焦点化されていることを示している。

このように副詞による談話の連結には単なる外面的な前方照応だけでなく、談話の状況に関与する知覚体系も援用されている。⁵つまり、(15)に見られるような極端なまでの場所を表す副詞句の前置がなされているのは、言語表現として提示されている内容ばかりでなく「劇における舞台設定の把握」という談話の状況が情報の配列に関与しているのである。⁶

2. 1. 2. 知覚的際立ち

副詞の前置による談話の連結に関して、大江（1984）はさらに知覚的な際立ちの効果を指摘している。談話構造的に見れば文末は最も際立つ位置であるが、前置詞句などの副詞句は文末に置かれるのが最もノーマルであるので、文頭に置かれることによって構造的により高められることをその理由と考えている。

(17) The speaker has a thought, in the context of utterance, and on that the grammatical processes operate. —大江（1984）

(18) “Nonoffensive defense” is a key part of the vocabulary of Soviet “new thinking, ” and it was a major theme of Crowe’s tour. The U.S.S.R. would launch its missiles, he was told, only in retaliation, never in a first strike.... At the Voroshilov General Staff Academy in Moscow, ... an instructor stressed that for the past two years, the scenar-

ios have always begun with the other shooting first.
(*TIME*, July 3, 1989)

(19) A : Aw, look at little Johnny spreading icicles under the
Christmas tree.

B : No, Johnny Put the icicles on the tree. Under the tree,
we put the presents. —Ward(1988)

(17)において大江が指摘していることは、(7)で見た構造の違いと対応させることができるであろう。文尾から文頭への平面的前置だけでなく、VP の要素から S の要素への構造的に高められたことが、知覚的にも、文尾とは違った前置要素の強めの機能を持つと言えよう。(18)における補文中の副詞句の前置は、上に揚げたような強めの他に、“the other shooting first” という主張の中心を焦点化するという効果もあげている。(19)について Ward(1988)は、前置詞‘on’と‘under’とが、どこに何を置くかに関して‘scalar values’を成して、それゆえに前置された‘under’には対比強勢が置かれると言っている。また‘under’は、本来は動詞‘put’との結びつきが強いのであるが、それを前置することで知覚的にも強められていると考えられる。

2. 2. 発話行為の背景的前置

2. 1. では、前置された要素が何らかの形で先行文脈とつながりを持っている場合について考察したが、一方、先行文脈を持たずにいきなり副詞表現が前置されることも極めて多い。Geis(1986)では、文頭の副詞の談話的機能として、前置された副詞表現が後続の文に適切なコンテキストを与えるような背景的機能について考察している。

(20) a. I left when John said he would leave.

b. When John said he would leave, I left.

(18) a において when は‘say’と‘leave’という二つの行為の成立する何れの時を

も指し示せるが、(20) b では、‘say’のみを修飾する。また、(20) a の when 節は純粹な「時」を示す副詞句であるのに対し、(20) b の when 節は時間というよりはむしろ主文によって表された出来事が起こったときの状況や環境である。⁸さらに Geis は場所の副詞句が文頭に現われたときの意味解釈について文のタイプとの相関関係を指摘している。

- (21) a. * In Boston, please buy a new car.
b. Please buy a new car in Boston. (request)
- (22) a. In Boston, I bought a new car.
b. I bought a new car in Boston. (assertion)
- (23) a. In Boston, there are a number of beautiful home.
b. There are a number of beautiful home in Boston.
(existential)

(21)に関して、これまで考察してきたことから考えれば、意味解釈をされる際に VP 内と結びついていた文尾の副詞句が、文頭に現われることによって VP の外から文全体にかかるように解釈される時、その意味的な整合条件が、副詞句と後続する文との間に生まれるのではないかと思われる。(22)の意味解釈について、Geis は、(22a) の “In Boston” は場所の副詞句だが、「ボストンにいた頃に」という ‘quasi-temporal’ な読みをするのに対し、(22b) はそのどちらの意味にも解釈可能であると述べている。(23)については、Bolinger (1977) 等でよく指摘されているように、存在文における文頭の場所の副詞句は、ある対象をある空間に位置づける機能を持っているが、同時にある対象が発見されうるという存在文の発話行為的背景として機能しているともいえるよう。

こういった各々の文のタイプが、その発話行為が成立するために通常持っている基本的な背景や環境を、Geis は、‘the individuating characteristics’ と呼んでおり、依頼文では行為が成される時とその状況が、断定文では行為が起こる時、状況、原因や目的が、そして存在文では対象物のある場所が、それぞれ、文頭に現われうる副詞の意味的な制限に関係すると結論づけてい

る。

3. 結び

本稿の意図するところは Adverb Preposing に関する体系的な理論付けではなく、一般に文体的変形として片付けられているこうした随意変形に働く要因について限られた材料を用いて例証することである。第一章では副詞の移動における文構造的ステータスの変化に関して考察し、前置された副詞表現が VP よりも上の S と意味的に関係を結ぶことを見た。また、第二章では、こうした事実を踏まえつつ、談話の意味的な整合性・結束性に関与する Adverb Preposing の談話的機能について、主として何が文脈を作り、維持していくのかという点から幾つかあげてみた。そして、一般に、述部を修飾すると見なされていた副詞の機能が、前置による文構造や談話の流れにおける変化によって、文や談話のレベルでかわりを持ち、文末とは違う機能を持ちうるということがわかった。また、文の認知体系の規定という面から見ても、副詞表現は移動変形とは片付けられない意味解釈上の問題をはらんでいる。つまり、談話を構成する規則や原則、意味の認知体系等が文法の規則に反映され、意味解釈に影響を及ぼしているのである。

註

- 1 動詞の厳密下位範疇に関しては Chomsky (1965), Lakoff & Ross (1967), 太田 (1980) 参照。
- 2 ただし、主題的副詞が対比的に用いられたときは新しい、重要なインフォメーションを表す。
In Paris, John was robbed, but in London, he wasn't [robbed] .
- 3 しかし、Lakoff (1987) は、前提の性質が除去されれば、前置された従属節内にも発話行為構文が現われうるとして次の例をあげている。
I want to stay, but because here comes my bus, I'd better leave.
- 4 村田 (1982) は倒置文における動詞は提示文的特性を持っていると述べている。つまり、情報の中心は倒置によって文末へ焦点化された主語の NP なので、動詞の情報量が

多くなると容認されない。

Beside him stood his mother.

* Beside him was standing up his wife.

* At the edge of the lake stood an old man only recently. (以上、村田)

- 5 このような言語外の要因が統語関係に影響することに関しては Leech & Short (1981) Fowler (1986) 参照。

- 6 ⑬における視点誘導は“schemer”と呼ばれる一種の連想関係に基づいていると考えられる。

- 7 ‘Scaler Values’は、前置要素と先行文脈中の entity とが‘inferential bridge’をなすものである。詳細は Ward (1988) Ch. 3 参照。

- 8 Geis (1987) は、時の副詞表現が純粋に「時」を表す場合と「状況」を表す場合との談話機能の違いについて考察し、「時」を表す場合は‘undated’な叙述に「時」を規定付けるのに対し、「状況」を表す場合はすでに時が特定された叙述を‘relativize’すると述べている。

(i) John died at noon.

$(\exists t) (At(Die(John), t) \ \& \ (t=noon) \ \& \ Earlier \ Than(t, now))$

(ii) I will leave in some situation.

$(\forall s) (In((\exists t) (At(I \ leave, t) \ \& \ Later \ Than(t, now))), s)$

- 9 Lakoff (1987) は“Prototype Semantics”をベースとして認知モデルによる文法の規定を試みており、その中で、there 構文のもつ意味要素の中に‘locational predicate’を持っていると述べている。

参考文献

- Bolinger, D. (1977) *Meaning and Form*. London: Longman.
- Chomsky, N. (1965) *Aspect of the Theory of Syntax*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Davison, A. (1984) “Syntactic markedness and the definition of sentence topic,” *Language* 60, 797–846.
- Fowler, R. (1986) *Linguistic Criticism*. Oxford: Oxford University Press.
- Fukuchi, H. (福地肇) (1985) 「談話の構造」, 東京: 大修館書店.
- Geis, M.L. (1970) “Time preposition as underlying verbs,” *CLS* 6: 235–249.
- . (1986) “Pragmatic determinants of adverb preposing,” *CLS* 22: 127–139.
- . (1987) “On situation adverbs” In B.D. Joseph and A.M. Zwicky ed. *Working Papers*

- in Linguistics*, Columbus Oh.: Department of Linguistics, The Ohio State University.
- Givon, T.(ed.) (1979) *Syntax and Semantics 12*. New York: Academic Press.
- Green, G.(1976) "Main clause phenomena in subordinate clause," *Language* 52, 382-397
- .(1980) "Some wherefores of English inversions," *Language* 56, 582-601
- Hooper, J.B.(1975) "On assertive predicates." In J.Kimball(ed.) 1975, 91-124.
- Ikegami, Y.(ed.) (池上嘉彦編) (1985) 英語学コース第4巻「意味論、文体論」. 東京:大修館書店.
- Kuno, S. (久野暉) (1978) 「談話の文法」. 東京:大修館書店.
- .(1980) "Functional syntax," *Syntax and Semantics 13*. New York: Academic Press.
- Lakoff, G.(1974) "Syntactic amalgams." *CLS* 20: 321-344.
- .(1987) *Woman, Fire, and Dangerous Things*. Chicago & London: The University of Chicago Press.
- Lakoff, G. & Ross, J.R.(1967) "Why you can't *do so* into the sink," *Syntax and Semantics 7*. New York: Academic Press.
- Leech, G. & Short, M.H.(1981) *Style in Fiction*. London: Longman.
- Leech, G. & Svartvik, J.(1975) *A Communicative Grammar of English*. London: Longman.
- Mc Connell-Ginet, S.(1982) "Adverbs and logical form," *Language* 58, 144-184.
- Murata, Y. (村田勇三郎) (1982) 「機能英文法」 東京:大修館書店.
- . (1983) 「文(II)」(講座・学校英文法の基礎第8巻). 東京:研究社.
- . (1984) 「文(I)」(講座・学校英文法の基礎第7巻). 東京:研究社.
- Ohye, S. (大江三郎) 「英文構造の分析—コミュニケーションの立場から—」. 東京:弓書房.
- Ota, A. (太田朗) (1980) 「否定の意味」. 東京:大修館書店.
- Quirk, R.& Greenbaum, S.(1973) *A University Grammar of English*. London: Longman.
- Ward, G.L.(1988) *The Semantics and Pragmatics of Preposing*. New York & London: Garland Publishing, Inc.